

二〇二三年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二三年 二月二日実施

国語

二日午後二科

- 一、問題に答える時間は五十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

野生のサルやゴリラを研究してきた私は、子どもの絵本に間違<sup>ちが</sup>った動物の姿が描<sup>えが</sup>かれているのに①大きな不満をもっていた。大きな耳を羽ばたかせて空を飛ぶゾウや、大粒<sup>つぶ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>を流しながら二足で立って歩くウサギなんてこの世にいるわけがない。そもそも動物が人間の言葉で話すなんてありえない。現実にはない動物の行動を物語にして子どもたちに聞かせるのは、教育として誤っているのではないかと思っていたのだ。

だから昔、ゴリラの子どもと人間の子どものアフリカのジャングルで出会う絵本をつくったとき、私はゴリラの子どもの気持ちになってゴリラ語で書いた。むろん、ゴリラ語などという言葉があるわけではない。でも、ゴリラは自分の気持ちを伝えるとき、決まった音声を出す。それを音声表記で書くことによって、現場の状況<sup>ききょう</sup>を伝えたいと思ったのだ。絵を描いたのは、子どものころから現地で野生のゴリラに出会ってきたコンゴ人の画家である。現地の子どもの気持ちになって、彼<sup>かれ</sup>とストーリーをつくった。

でも、アフリカの奥地<sup>おくち</sup>でゴリラの調査をしながら、村々を渡<sup>わた</sup>り歩いて子どもたちの学びの場を目にすると、②私<sup>わたし</sup>のほうの間違<sup>まちが</sup>っているのではないかと思いはじめた。中央アフリカの熱帯雨林では、村人たちが子どもたちに昔話を語る。そこに登場する動物たちは絵本の世界のように、人間の言葉をしゃべり、人間のような性格でドラマを演じる。アフリカばかりでなく、世界中のどの民族にも、絵本で語るような動物の物語があるし、それを聞いて子どもたちは育つ。

まず自然は、子どもたちにとって優<sup>やさ</sup>しいものでなければならないのだ。言葉を操<sup>あやつ</sup>る人間の子どもたちにとって、世界は体で感じる対象であるとともに、想像するものでもある。そのなかで動物たちはさまざまに\*デフォルメされ、子どもたちに語りかける。初めて出会う多様な動物たちに子どもたちは驚<sup>おどろ</sup>きの目を向け、その動物たちに同化して、世界をながめるようになる。その驚きと感動こそが、子どもたちに想像する力をあたえるのだ。

動物園は、ちょうどこの絵本や昔話と現実世界との中間にあると思う。野生の動物たちが人間の前でのんきに日なたぼっこをすることなどめつたにないし、自らやってきて語りかけることなどありえない。多くの野生動物たちは人間と敵対関係にあり、人間を避<sup>さ</sup>けようとしているからだ。彼らが実際どんな姿をして、どんな暮らしを送っているか、子どもたちが近く

で詳しく観察することは不可能なのである。

動物園は、お話のなかに登場する動物たちの本当の姿を教えてくれる。どんなにおいがして、どんな声を出すか、人間と違うどんな能力があるのか。子どもたちはそこで、自然が自分たちの想像を超える a に満ちていることを悟るのだ。しかし、それはまだ本当の自然ではない。野生動物たちの能力は、彼らが実際に暮らしている自然のなかで発揮されるからである。

私が園内を歩いた日、ワオキツネザルの赤ちゃんが誕生した。母親の母乳を気持ちよさそうに吸う赤ちゃんを、わずか20センチの距離から人間の幼児がのぞきこんでいるのが印象的だった。彼らはここまで人間を受け入れてくれるようになった。きつとこの幼児はキツネザルの赤ちゃんになった自分を感じていたに違いない。それが人間の子どものすばらしい能力だ。子どもたちは動物ばかりか、岩にだって風にだって川の流れにだってなることができる。しかし、やがて子どもたちは本当の自然のなかに、人間としての自分を見つめる。だから、動物園は動物たちの野生の姿を見せなければいけないのだ。

③ サルを知ることには人間を知ることにつながる。実は、人間は自分の野生の姿や心をよく知らない。人間は長い間、サルや類人猿と同じ自然のなかで暮らしてきた。自然を改変し野生動物を排除して、人工的な環境で暮らしはじめたのはつい最近のことなのである。私たちが育てた野生の世界を知るとは、これから人間が歩むべき道を考えるときに役立つはずである。サルの世界を通してそれを伝えるのも、博物館の役割だと思う。

アフリカの熱帯雨林に野生復帰したゴリラを訪ねた。小さいころに親を失い、孤児院に保護されたり、そこで生まれたりしたゴリラだ。野生のゴリラの数が激減し、絶滅の危機に瀕している。人間のもとで育てられたゴリラを野生にもどし、数を増やそうという試みである。ゴリラを放すことによつて、その生態系に新たな大きな影響をあたえてはいけない。そこで、以前ゴリラが生息していたことがわかっていて現在は絶滅している場所が選ばれた。川で囲まれた孤島のような森である。ゴリラは泳げないから、川を渡って他の場所に移動することはない。

ボートで1時間かけて会いに行ったのだが、ゴリラとの出会いはとても印象深いものだった。2カ月前に放された十数頭の群れは、まだ野生の食物をほとんど口にすることができず、餌を運んでくる人間をひたすら待っていた。水辺に設けられた鉄柵のこちら側から果物を投げてやると、走り寄ってむさぼりついた。野生のゴリラは毎晩ベッドを樹上や地上につくつ

て寝るのだが、まだベッドをつくらずに地上の決まった場所で寝ているとのことだった。

別の場所に、数年前に放された3頭の若いゴリラがいた。もう野生の食物を自分でとって暮らしているという。しかし、ボートの音を聞きつけると水際まで駆け寄ってきた。3頭が肩をすり合わせるようにならんで、私たちをじつと見つめている。その目がなんとも悲しそうであたたまれない気持ちになった。「なんで僕らを置き去りにしたの？」と訴えているような気がした。まだこのゴリラたちは人間に頼っている。人間が好きで、人間といっしょにいたいのだ。野生の食物を口にしていても、心は人間のもとにあると私は思った。

親から離されて、子どもときから人間の手で育てられた野生動物に、本来の野生の心をもたせるのはとても難しい。毎日ミルクや食べ物もらい、体をきれいにしてもらい、抱かれることで不安な心をなぐさめてもらう。その記憶は長い間消えることがない。本来なら母親や父親、年上のゴリラたちに育てられるはずのゴリラたちが、人間の世話で育った。このゴリラたちは自分の仲間よりも人間が好きになってしまったのである。ゴリラだけではない。チンパンジーやオランウータンなども世界各地に孤児院ができ、野生復帰が試みられているが、<sup>④</sup>まだほとんど成功した例を聞かない。

これは人間の子どものもあてはまる話だ。「b」というように、幼いころの経験によってつくられた心は、おとなになっても変わることがない。生まれて初めて出会う人間に身の回りの世話をしてもらい、何もかも頼って暮らした経験が、人間を信頼して生きる心をつくる。逆に、幼いころに虐待を受けたり、裏切られたりした経験は、子どもの心に大きな傷を残す。

絵本には書いてはいけないことがあるという。それは、子どもに食べ物をあたえてくれる人を決して死なせてはいけないというタブーだ。子どもにとって食べ物をあたえてくれる人は、世界をあたえてくれる存在である。その人がいなくなったら子どもの世界は消失してしまう。いわれてみれば、『赤ずきん』も『三匹の子豚』も、食べ物をあたえてくれるお母さんは、いつも陰に隠れて子どもたちを見守っている。食べ物をあたえるという行為は、子どもにとってそれほど神聖で侵すべからざるものなのである。

食物が溢れ、たやすく手に入る現代の私たちは、子どもたちに食べさせることをあまりにも軽んじてはいないだろうか。3年間も母乳を吸って育つゴリラに比べ、人間の子どもはわずか2年足らずで離乳してしまう。しかし、離乳したゴリラはすぐに自立して食べはじめるのに対し、人間の子どもは長い間食べ物をあたえられて育つ。食事は単なる栄養補給ではない。

子どもたちに安心できる世界を提供し、信頼の芽を育てる大切な機会なのである。

人間にとって野生の心とはなんだろう。それは、仲間とともに未知の領域に分け入って新しいことに挑戦する心であり、おそらく幼児のころに形づくられる。そのために仲間である人間を信頼し、共通の目標を立てていっしょに歩こうとする気持ちが必要だ。⑤個食が目立つ現代の食事風景を見ると、子どもたちが野生の心を抱けずにいるのではないかと、ふと不安に思う。

人間とはおせっかいな動物だと思つづくと思う。相手が困ってもいないのに忠告したり、手をさしのべたりする。相手が気づいていないことをわざわざ伝え、必要以上の物を用意してあたえる。その典型的な行為が教育である。

⑥人間以外の動物は、たとえ相手が自分の子どもであっても教えたり訓練したりすることはめつたにない。唯一、教える行為が知られているのは猛禽類や食肉類だ。ミサゴの親鳥はせっかく捕らえた魚をわざわざ放して幼鳥に捕獲させようとする。ライオンの母親は追いつめた獲物を捕らえずに子どもにも追跡させる。

でも、人間に近いサルや類人猿にこういった行動は見られない。チンパンジーでわずかに2例だけ報告されているにすぎない。母親が硬いナツツを木の枝を使って割るときに、ゆつくりとその動作をくり返して子どもに確認させたという例と、母親が道具を用いてシロアリを釣り上げていたとき、それをのぞきこんでいた子どもにわざとゆつくり動作を見せた後、釣り棒を残して立ち去つたという例である。いずれも、意図的だつたかどうか、確証は難しい。

このことから、獲物を捕らえたり道具を使つたりする技術以外に、動物は教える必要がないことがわかる。人間も霊長類の一種で、もともとは植物が主食である。狩りや道具が必要になるまで、教育とは無縁だつたに違いない。しかも人間以外の動物では、親子の間以外に教えるという行為は見られない。それは、何かを教えると自分が損をすることが多いからである。自分が不利益を被つてまで教えようという動機をもつのは、親以外にはありえないのだ。

ではなぜ、人間は親子でもない赤の他人が一生懸命教えようとするのだろうか。それは人間が他者のなかに自分を見ようとする気持ちや、目標をもって歩もうとする性質をもっているからだと思う。そして何よりも、動物の親子のような信頼関係を、見ず知らずの他人との間にもつくれることができるからである。

…… 中略 ……

サル真似とは、考えもなしにむやみに他人の動作を真似ることだ。人間はあまりにもそれが上手なので、サルになぞらえて戒めたのだらうと思う。でもサル真似をするためには、相手の心と体に同化しなければならず、その上で動作のつながりとしての目的を即座に理解する必要がある。そして何よりも、それをしてみたいという強い動機がなければならぬ。アイドルのしぐさやファッションがすぐに普及するのは、みんなが大きな憧れを抱くからだ。

人間の子どもがゴリラの子どもと違うのは、だれかのようになりたいたい、未知のことを知りたいという強い欲求をもっていることだ。その望みをかなえるには憧れの人に会うこと、その知識や経験をもつ人に聞くことが一番である。これまで子どもたちはみんなそうしておとなになった。おとなは子どもが知らない知識をもっているからこそ、子どもたちに信頼され、教育することができた。

しかし今、子どもたちは知りたいことを人から学ぶ必要がない。⑦ インターネットを開けば、そこには無限の知識と未知の世界が広がっている。人間のもつ知識はすべて情報としてアクセス可能だと子どもたちは思っている。キーワードを入れるだけで、知りたい答えがいつでも得られると考えているのだ。

学びの方法が変われば、教え方も変わらざるを得ない。子どもたちは知識を人に求めてはいないので、知識をあたえるだけでは信頼も尊敬もしてくれない。それでも相変わらず人はおせっかいなので、無理に教えようとして嫌がられてしまう。信頼関係をつくれぬ教育現場ではトラブルが続出するのだ。

現代は、知識そのものではなく、実践する力や考える力を教える時代であると私は思う。過剰な情報はむしろ人々から想像する力を奪う。人間の身体を使って何ができるか、どんな発想の展開が可能か、それを知るには人と出会い、実践の場に参加しなければならぬ。⑧ サル真似はむしろ学びの基本である。人と関わりをもちながら、他者のなかに自分を見つける楽しさを知ってほしい。そこに新しい時代の信頼と学びの場が開かれるのではないだろうか。

(山極 寿一『ゴリラからの警告』 毎日新聞出版)

〈注〉\*デフォルメ……美術作品などで、対象を意識的に変形させて表現すること。

問一 文中の空欄 a・b に入れるのに最も適当な言葉をそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- a ア ペナルティー    イ テクノロジー    ウ リアリティー    エ プライバシー    オ クオリティー  
b ア 千里の道も一歩から    イ 石の上にも三年    ウ 一寸の虫にも五分の魂<sup>たましい</sup>

エ 三つ子の魂百まで    オ 百聞は一見にしかず

問二 ——線①「大きな不満をもっていた」とありますが、それはどのような「不満」ですか。「不満」の内容を本文中から五十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問三 ——線②「私のほうが間違っているのではないかと思いはじめた」とありますが、筆者はどのようなことに気付いてこのように思ったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 絵本や昔話は、現実にはない動物の行動を想像して作られたものなので、そこに動物の世界の現実を当てはめてしまうと、人間の子どもたちは現実世界を誤ってながめることになるのだということ。

イ 世界中のどの民族にも絵本で語るような動物の物語があり、そこに登場する動物たちはみな人間の言葉をしゃべっているの、ゴリラ語で絵本を書くとき世界中の物語と矛盾<sup>むじゆん</sup>してしまうのだということ。

ウ 人間の子どもたちは、野生の動物たちが実は人間の言葉や性格を理解した上で行動しているのだということ、昔話によって知り、そこで得られる驚きと感動が子どもたちを育てるのだということ。

エ 自然のなかで暮らす多くの野生動物たちは人間と敵対関係にあり、人間に不信感を持っているので、人間のような性格をあたえてストーリーを展開させるのは良くないことなのだということ。

オ 人間の子どもたちは、絵本のなかで動物がしゃべることによって動物たちと同化し、初めて出会う多様な動物たちから驚きをあたえられ、感動することによって想像する力を得ることができるとのこと。

問四 ——線③「サルを知ることには人間を知ることにつながる」とありますが、筆者がこのように言うのは、どのような考えがあるからですか。答えなさい。

問五

——線④「まだほとんど成功した例を聞かない」とありますが、ゴリラやチンパンジー、オランウータンなどの野生復帰が成功しにくい理由を、筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 親から離されて育った動物たちは、不安な心のなぐさめかたが分からないまま成長することになり、一匹<sup>びき</sup>で生活することが難しくなってしまうから。

イ 人間に不安な心をなぐさめてもらった経験のある動物たちは、その記憶が消えずに残るため、自分の仲間よりも人間のことを信頼し、好きになってしまうから。

ウ 絶滅の危機に瀕している動物たちは、群れとなって生活することに慣れていないので、野生の心をもつことができなくなってしまうから。

エ 人間からあたえられる食べ物でしか育たなかった動物たちは、野生の食物が口に合わず、人間がくれる食べ物をいつも望むようになってしまうから。

オ 人間に育てられた動物たちには、自分は人間であるという思いが生まれるので、野生での生活に嫌悪感<sup>けんお</sup>をもってしまうから。



問六 — 線⑤ 「個食が目立つ現代の食事風景を見ると、子どもたちが野生の心を抱けずにいるのではないかと、ふと不安に思う」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 食事はあたえてくれる人たちに對して信頼の気持ち芽生える場であるが、個食では信頼が育たなくなるため、仲間とともに共通の目標を立てて新しいことに挑戦する心をもてなくなるから。

イ 食事は単なる栄養補給ではなく安心できる世界を実感できる機会であるが、個食だと安心を実感できる機会がないため、様々な危険にあふれた野生の世界で生きられる強い心を育めないから。

ウ 食事は未知の領域にともに分け入っていっしょに歩こうとする仲間を見つげるために摂るものなのに、個食ではいつまでもたっても信頼できる仲間ができないから。

エ 食物に溢れた現代では食べ物はいくらでも手に入ることで初めて食事として成立するのに、個食で自分から食べ物を探すのでは単なる栄養補給になってしまうから。

オ 離乳までの時間が野生の動物より短い人間の子どもの場合は、個食をすることで野生の動物よりも親に食べさせてもらう期間が短くなり、より早く自立せざるを得なくなるから。

問七 — 線⑥ 「人間以外の動物は、たとえ相手が自分の子どもであっても教えたり訓練したりすることはめつたにない」とありますが、「人間以外の動物」が、親子の間以外に「教えたり訓練したり」しないことの理由を示している部分を本文中から二十五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問八

——線⑦「インターネットを開けば、そこには無限の知識と未知の世界が広がっている」とありますが、インターネットの普及によってどのような変化が起きましたか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア インターネットが普及する前は、おとなは知識をもっているだけで信頼と尊敬の対象になっていたが、インターネットが普及した現在では、情報にアクセスする力をもっていないと信頼と尊敬の対象にはならないので、多くのおとなたちは子どもたちとの信頼関係を築けずにいる。

イ インターネットが普及する前は、「未知のことを知りたい」という強い欲求を子どもたちはもっていたが、インターネットが普及した現在では、「無限の知識」に触れることが容易になったので、子どもたちは強い欲求をもつ必要がなくなり、教育することが難しくなった。

ウ インターネットが普及する前は、子どもたちは「子どもが知らない知識」をもっているおとなに憧れていたが、インターネットが普及した現在では、子どもたちが知識をもったおとなに憧れることがなくなり、信頼関係のない教育現場ではトラブルが続出するようになった。

エ インターネットが普及する前は、おとなは知識や経験が豊富な存在として頼られていたが、インターネットが普及した現在では、「人間のもつ知識」にはキーワードを入れるだけで簡単にアクセスすることが可能となり、おとなは今まで以上に知識や経験を求められるようになった。

オ インターネットが普及する前は、限られた情報のみがおとなたちから子どもたちに伝えられていたが、インターネットが普及した現在では、あらゆる情報に簡単に触れることができるため、過剰な情報にさらされ、本当に必要な知識は何か分からなくなっている。

問九 — 線⑧ 「サル真似はむしろ学びの基本である」とありますが、「サル真似」が「学びの基本である」と筆者が考えるのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア サル真似をすることで、それをしてみたいという強い動機や大きな憧れを新たにもつことができるから。
- イ サル真似をすることは、経験をもつおとなから未知の知識を学び、彼らとの信頼関係を築くことになるから。
- ウ サル真似をすることで、学ぶ目的が明確になる上、自分のなかに他者を感じることができるようになるから。
- エ サル真似をすることで、発想の展開が予想でき、過剰な情報によって想像する力を奪われるのを防げるから。
- オ サル真似をすることは、人との関わりをもちながら実践する力や考える力を養うことにつながるから。

## 問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

五月の連休が明けてすぐの頃、五年二組に転校してきた沢茉莉香は、担任の「ポッチャン」から村山睦子（「わたし」）や西原咲と帰り道が同じ方向だと教えられ、二人に「いつしよに帰っていい？」と声をかける。茉莉香は、転校した事情や今の暮らし、小さい頃からずっとバレエを習っていることなどを二人に話す。

そうして茉莉香は、わたしと咲ちゃんがずっとふたりで続けてきた登下校に加わった。

教室でもいつしよに行動するようになり、特にアナウンス委員になってからは、同じ委員の咲ちゃんのそばにすることが多くなった。

週に一度の会議があるときには、かならずふたりでおしゃべりしながら教室を出ていく。音楽発表会の前日などには、昼休みもいつしよに準備をしていた。

うちのクラスのアナウンス委員は一人だけということになっていたし、それは四月の時点で咲ちゃんに決まっていたのだけれど、茉莉香は転入生ということで、特別に二人目のアナウンス委員になれた。

① 正直言って、わたしはおもしろくなかった。

クラスに一人だけということだったから、わたしは咲ちゃんといつしよの委員をあきらめてポスター委員になったのだ。ポスター委員はクラスに二人いるけれど、もう一人の加藤君はサボってばかりで、委員会の記録も会議での発表も、みんなわたしに押しつけてくる。

そもそもわたしは、咲ちゃんといつしよならどの委員でもいいと思っていたのに、咲ちゃんはめずらしくアナウンス委員にこだわって、ひとりで立候補してしまったのだ。

そんな咲ちゃんにも、当たり前のように咲ちゃんの横にくっついてある茉莉香にも、茉莉香の希望を通して a ルールを変えたポッチャンにも、やっぱり少し腹が立つ。

はじめの頃は楽しかった登下校も、そのうち咲ちゃんと茉莉香のふたりだけで盛り上がるが多くなった。

三人で帰っていて、茉莉香は「ねえ咲ちゃん」「聞いてよ、咲ちゃん」と、咲ちゃんにばかり話しかける。

わたしがなにかを話しはじめると、茉莉香はつまらなそうに笑顔を消して、だまってしまふ。そして、わたしと咲ちゃんの話の隙を見て、また咲ちゃんにだけ話しかけようとすゝのだ。

気づくとおしゃべりに夢中になつてゐるふたりの横を、無言で歩いてゐることが何度もあった。

おまけに、学校から家がいちばん近いのはわたしだったから、自分の家の近くで「バイバイ」と手をふつたあとは、咲ちゃんと茉莉香のふたりで帰つていくことになる。

楽しそうにゆれるふたつのランドセルが遠ざかつていくのを見ると、<sup>②</sup>さびしいような不安なような、もやもやとした気持ちになつた。

茉莉香は、咲だけでなく睦子と仲の良かったキミやユーリとも親しく話をするようになっていた。茉莉香から浴衣を着て夏祭りに行こうと誘われた睦子は、親が反対するからという理由で誘いを断つた。その頃から、咲と茉莉香は睦子を遊びに誘わなくなり、二人で塾に通い始めたり二人だけで遊びに行つたりするようになる。家庭科の時間、睦子は同じ班になつたキミから話しかけられた。

「むつちゃん、最近ちつとも咲ちゃんといつしよにいないよね。前はあんなに仲良かったのに」

「えっ？」

「咲ちゃんのこと、茉莉香に取られちゃったね」

一瞬、なにを言つてゐるのだろうと思つたけれど、その言葉の意味がじわじわとわかってくると、からかわれてゐるような気持ちになつた。

咲ちゃんは物じゃないのだから、取られるとか取られないとか、そんな言い方をされたのもいやだった。

「ねえむつちゃん、茉莉香のこと、どう思う？」

キミちゃんは、急に声を小さくした。こんな言葉のあとには、たいてい悪口が続く。

すぐ横にいる奈保ちゃんは、わたしたちの話なんてどうでもいいという感じで、卵をポウルに割り入れてかき混ぜはじめ

た。

「どうって……」

それ以上なにも言わずにだまっていたら、

「わたしは嫌い。だつてうそつきなんだもん」

キミちゃんが言った。

「うそつきって、茉莉香が？」

興味なさげにしてやり過ごそうと思っていたのに、つい聞き返していた。しまった、と思ったときには遅かった。エサに食いついてしまった魚といっしょだ。

キミちゃんは、さらに **b** 近づいてきた。

おばあちゃんから茉莉香の家庭の事情を聞いたキミは、父親が外国に単身赴任していることも、引越してきた理由も、茉莉香が話していたことはみんなうそなのだと思子に教える。

キミちゃんはずくすく笑ったけれど、わたしはなにがおかしいのかわからなかった。するとキミちゃんも笑うのをやめた。「うちのおばあちゃん、茉莉香のこと、かわいそうにねえっていつも言うんだけど、なにそれって感じ。だつて、だからうそついていいなんてことにはならないじゃない。ジジョーがある家の子なんていっぱいいるけど、みんなうそなんてつかないし。咲ちゃんだつて、あんなにいい子なんだから」

「……うん」

…… 中略 ……

「わたしも、このあいだまで茉莉香のこと信じてたから、なんか損した気がするんだよね」

「……うん」

「バレエの大きなコンクールに出たって言ってたけど、あれもきつとうそだよ。ユーリの妹が、茉莉香がそんなに上手だなんて聞いたことないって言ってるらしいから。あ、ユーリの妹もバレエやってるんだけどね、大きなコンクールに出たのな

ら、ちよつとは話題になるはずでしょう？」

「うん。そう……なの？」

「そうだよ」

「ユーリも知ってるの？ 茉莉香がうそついてるって」

「そりゃあね。陰ではユーリ、うそつき茉莉香って言ってるくらいだから」

…… 中略 ……

始業時間が迫っているというのに、咲ちゃんと茉莉香の姿は教室になかった。

ふたりそろってお休みなのだろうかと思ひ、教室のうしろのロッカーをふり返って見たけれど、ふたりの棚にはちゃんとランドセルが置かれていた。

不思議に感じていたとき、黒板の上に取りつけられたスピーカーから、カチリと小さな音がした。そして、やたらと元気の校歌のメロディーにのって聞こえてきたのは、茉莉香の声だ。

『みなさんおはようございます。二月二十八日水曜日、今日の天気は曇りのち雨、気温は六度です。手洗いとうがいを忘れずに、今日も一日、元気に過ごしましょう』

そうか、今日はうちのクラスがアナウンス当番で、ふたりは放送室に入っているのか、と思った。当番になると、朝と昼、そして放課後のアナウンスをすることになっている。

茉莉香の言葉のあとで、咲ちゃんの『お……』という声があった。その声が少し震えていたし、それから不自然な間があったから、咲ちゃんが緊張しているのはすぐにわかった。

月に一度のアナウンス当番のたびに咲ちゃんの声は上擦るけれど、その日は特にひどい気がした。寒さのせいで、体が固くなっていたのかもしれない。

アナウンス当番の子の緊張がスピーカーから伝わると、みんなの耳はよけいに放送に集中するようになる。

教室が静かになったタイミングで、咲ちゃんは言った。

『お、おはようございます』

「えっ」とだれかがつぶやいたあと、教室の中にクスクス笑いが広がった。「武士かよ」という男子の声も聞こえた。咲ち

やんはそんなことも知らずに、話しつづける。

『本日のアナウンス当番は、四年……じゃない、えっと、五年二組、西原咲と』  
『沢茉莉香です』

そのあとは、音楽だけが流れつづけた。「西原、うけるー」と木村君が言い、教室の笑い声は大きくなった。「あれでよくアナウンス委員になったよな」という声に混じって、「笑ったらかわいそう」というユーリの声も聞こえた。

それから五分ほどすると、教室に茉莉香が入ってきた。③そのうしろに隠れるようにして、咲ちゃんがくつついていて、席についたふたりに、

「おもしろかったでござる」

と男子が言った。

茉莉香は、それを無視して机の中からノートや教科書を取りだしはじめた。咲ちゃんは、顔を赤くしてうつむいた。わたしのとなりの席の芽衣ちゃんが、

「さっきのあれって、うけねらいかな？」

とわたしを見たから、

「そんなわけないよ」

とつさに大声で言ってしまった。

「だれだつて緊張するよ、全校放送なんだから。わたしだつてきつとできないと思う。ほんと、全然！」

わたしのその声が教室中に響いてしまったのは、ちょうどそのタイミングでポツチャンが教室に入ってきたからだ。

あまり状況がわかっていないポツチャンが

「村山さん、まあ、朝なんだから落ち着こう」

と言い、わたしまで赤い顔をしてうつむくことになってしまった。

…… 中略 ……

その日はうちのクラスが校内掲示板の確認をする当番だったのに、加藤君は終わりの挨拶のあとで、c 教室を出てしまった。



当番だということを忘れてしまっているのか、忘れたふりをしているのかはわからないけれど、どちらにしても腹が立つ。しかたなく、わたしはひとりで学校内の掲示板を見回りはじめた。

職員室前の掲示板を確認し、保健室前では給食の献立表がはがれかけているのを直した。

それから玄関ホールまで行って、正面の太い柱のボードに張られている（歯みがきをしよう）というポスターがかたむいて、いることに気がついた。

押しピンをそっとぬき、それを外した。そしてまた張ろうとしたのだけれど、きちんと位置が定まらない。少しはなれたところから確認しようとしても、手で押さえておかなければならないから、腕の長さまでしかはなれられない。

どうしよう、と思っていたら、ふいにだれかの手がわたしの右うしろからすつとのびてきて、ポスターを押さえてくれた。「わたし、押さえとくから」

小さな声にふり向くと、ランドセルを背負ったままの咲ちゃんがそこにいた。わたしはポスターからはなれて位置を確認し、きちんと貼り直した。

「ありがとう」

と言うと、咲ちゃんにはにかんだように笑って首をふった。

「咲ちゃん、まだ帰らないの？」

「うん、④ さつき帰ろうとしてたら、むっちゃちゃんがひとりで掲示板を見回っているのが見えたから、追いかけてきた」

咲ちゃんは、ふわふわの白いセーターを着て、ポリウムがあるたまご色のマフラーを巻き、オレンジと茶色のチェックのズボンをはいていた。まるで全身がスイーツみたいだ。

「今日、塾は？」

「今から行くよ。でも、時間はまだだいじょうぶ。茉莉香には、先に行つていてって言うてあるし」

それから咲ちゃんはひと呼吸おいて「あのね、むっちゃちゃん」と、あらたまつた感じで言った。

「うん？」

「このあいだは、ありがとう」

「え？」

「アナウンス当番のことで、みんなに笑われたとき。だれだって緊張するよって言っただけで、すごくうれしかった」

「あ、ううん」

わたしは、あわてて首をふった。あのときは、咲ちゃんをかばうとか、そんなつもりはちっともなかった。

ただ、咲ちゃんがどんなに勇気を出してアナウンスをしていたかがよくわかるから、咲ちゃんを笑うみんなに腹が立って、とっさに言葉が出てきただけだ。お礼を言われるようなことじゃない。

「だけど咲ちゃんは、

「ずっと、ありがとうって言おうと思ってた」

と言う。

「そんなのいいよ。だって、本当にわたしだって緊張すると思うから。全校放送なんて無理だよ。無理無理、ぜったい」

わたしが、自分のあごのあたりで右手をひらひらふると、咲ちゃんはちよつと笑った。だけど、その笑顔はあまり続かず、

「うん、でも……」

と言いながら、少し下を向いた。

「……あの放送のあと、わたしちよつと落ちこんだんだ。なんかやつぱり、<sup>⑤</sup>わたしはわたしなんだなあ、って思っちゃって」

「え、そんなに気にしなくてもだいじょうぶだよ。みんな、もうすっかり忘れてるから」

わたしが言うと、咲ちゃんは

「んー、そういうことじゃなくて」

と首をひねった。

「ほらわたし、天然だとかのんびりしてるとかって、よく言われるでしょう？ そういうキャラでいるのが、ずつといやだつたんだ。それで、茉莉香やキミちゃんたちみたいに、自分の思ってることをはっきり言えるようになって……。最近

は、ちよつとそうなれたような気がしてただけど、なんか勘<sup>か</sup>ちがいだったみたい」

<sup>⑥</sup>咲ちゃんの声は、どこか遠くから聞こえてくるみたいに感じられた。

「もう、咲ちゃんったらしつかりして」「ほらまたぼうつとしてる」と言って、咲ちゃんのことをよく笑っていたのは、このわたしだ。

他の子も言っていたけれど、近くにいたわたしが、たぶんいちばん言っていた。

それが咲ちゃんを傷つけていたなんて、思いもしなかった。

「……ごめん、咲ちゃん」

「えっ？」

「わたしだよ、そういうこと言ってたの」

と言うと、咲ちゃんはわたしに向かって両手を開き、車のワイパーみたいに動かした。

「あ、ううん、そうじゃなくて。わたしがそういうキャラなのは本当のことで、だからべつにむっちゃんが悪いわけじゃないよ……。それよりも、茉莉香がむっちゃんに不機嫌な態度をとったりしたとき、ちゃんとかばってあげられなかったわたしのほうこそ悪いと思ってる。そういう自分、ぜんぶ、丸ごと変わったかっただけ……」

「変わらなくていいよ」

「え？」

「咲ちゃんは変わらなくていいよ。わたしは咲ちゃんの、のんびりしてるところが大好きなんだから」

わたしが言うのと、咲ちゃんは広げていた掌をぎゅつと結んで、

「うん」

とうなずくと、少しのあいだだまってしまった。

わたしは、だれもいなくなった廊下をゆつくりと歩きました。咲ちゃんも横に並んだ。

十歩くらい進んだところで、思いきって、

「茉莉香のこと……」

と言いかけて、すぐに口をつぐんだ。⑦ ずっと気になっていたことだけれど、やっぱり言っはいけない気がした。

すると咲ちゃんのほうから、

「むっちゃんも知ってるんでしょ？」

と聞いてきた。わたしが言葉につまっていたら、

「うそつき茉莉香<sup>まりか</sup>って」  
と続けた。

「うん、キミちゃんが言つてたから。咲ちゃんは平気？ そういうの」

と言うと、咲ちゃんは「んー」とうなりながら唇<sup>くちびる</sup>をかみ、それからゆっくりと、

「もちろん、はじめはびっくりしたし、今でもときどきいやだなあと思うことはあるけど。でも茉莉香のうそに、<sup>⑧</sup>わたしはみんなほど腹<sup>はら</sup>が立たないんだ。っていうか、あの茉莉香でもうそをつくんだって思ったたら、むしろほっとするっていうか」

と言った。

「ほっとする？」

「そう。なんかね、茉莉香にもそういうところがあるんだってわかったら、なあんだ、茉莉香だつて完璧<sup>かんぺき</sup>じゃないだつて気がして。それに茉莉香のうそって、ジャアクなうそじゃないから」

「ジャアク……、あ、邪悪<sup>じあく</sup>？」

「そう。茉莉香のうそは、邪悪なうそじゃないの。友だちをからかったり、いじめたりするためのうそじゃなくて、ぜんぶ自分のことばかり。こうだったらいいなとか、こうなったらうれしいなつて思ったことを、つい本当のことみたいにしゃべっちゃうんだよね。その気持ち、わたしはちよつとわかるから」

「どうして？ 咲ちゃんはうそなんかつかないのに」

「うん、口に出しては言わないけど、茉莉香と同じようなことを考えることはよくあるの。うちもお父さんいないから、小さいときからしょっちゅう想像<sup>そうぞう</sup>してた。わたしには、実はすごくカッコよくてお金持ちのお父さんがいて、今はしかたなくはなれて暮<sup>く</sup>らしているけど、いつもわたしのことを心配してくれてるんだ、とか。ある日とつぜん会いに来てくれるんじゃないか、とか」

咲<sup>さき</sup>ちゃんは「ばかみたいでしょ？」と言った。

わたしは今まで、わたしの目にうつる咲ちゃんしか見てこなかった。天然で、ちよつとたよりなくて、ぼんやりしている

やさしい咲ちゃん。

でも本当は、ものすごくいろんなことを感じたり考えたりして、わたしなんかより、ずっと強くてしっかりしているのかもしれない。

まわりのみんなのうわさとか悪口とかに、ふり回されないくらいに。

昇降口で立ち止まり、わたしは

「教室に荷物を置いてるから、わたしは戻るね」

と言って、教室に続く廊下のほうを小さく指さした。

咲ちゃんは、

「うん、それにしても寒いねえ」

と言いながら靴をはき替え、

「じゃあね」

と手をふって、二、三步進んだところで立ち止まってふり向いた。

そしてわたしと目を合わせると、なぜだか⑨泣き笑いのような顔をして、

「むっちゃん、ごめんね……」

と、とてもやさしい声で言った。

咲ちゃんのその言葉は、冷たい空気に白く浮かんで消えていった。

(中山 聖子 『雷のあとに』 文研出版)

問一 文中の空欄 a に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア きつちりと    イ ぐいっと    ウ ひよこっと    エ あっさり    オ さっさと

問二——線①「正直言つて、わたしはおもしろくなかった」とありますが、「わたし」は何に対して「おもしろくなかった」と感じているのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 茉莉香は転校生というだけで特別扱いあつかされているのに、「わたし」の意見はみんなに無視されていること。

イ 茉莉香がいつも咲ちゃんのそばにいて一緒に行動していることと、転入生だからという理由で希望が簡単に通ったこと。

ウ 咲ちゃんが茉莉香のことばかり気にしていることと、茉莉香がいつの間にかクラスの中心になつていくこと。

エ ポツチャンが加藤君と「わたし」を勝手にポスター委員にしたことと、加藤君がそれに甘えて何もしないこと。

オ みんなはそれぞれやりたいことをやりたいようにやっているのに、「わたし」はそれを見ているしかならないということ。

問三——線②「さびしいような不安なような、もやもやとした気持ち」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 仲の良かった咲ちゃんが、これからは自分よりも茉莉香と仲良くなつてしまうような気がして、今まで通りの咲ちゃんとの関係が続かないのではないかと心配する気持ち。

イ 自分がいなくなつた後の茉莉香と咲ちゃんが、自分のことをどんなふう話題にするのか気になり、悪口を言われるのではないかとおびえる気持ち。

ウ いっしょに帰つていても自分だけ話に加われないことが多いため、先に別れてしまつたとさらに話題についていけなくなつてしまうのではないかと心細くなる気持ち。

エ 自分のいちばんの仲良しだつた咲ちゃんが、茉莉香と二人だけの時間を多くもつことで、これからは咲ちゃんを独り占めできなくなるのではないかとあせる気持ち。

オ 本当はせっかくの転校生である茉莉香ともつと仲良くなりたいのに、このままでは咲ちゃんに茉莉香を取られてしまうのではないかと残念に思う気持ち。

問四——線③「そのうしろに隠れるようにして、咲ちゃんがくつついている」とありますが、「咲ちゃん」が茉莉香のうしろに隠れて、人目を避けるさようにしていたのはなぜですか。説明しなさい。

問五——線④「さつき帰ろうとしてたら、むっちゃんがひとりで掲示板を見回つているのが見えたから、追いかけてきた」とありますが、「咲ちゃん」が追いかけてきたのは何のためですか。答えなさい。

問六 ——線⑤「わたしはわたしなんだなあ」とありますが、「咲ちゃん」はどのような意味をこめてこのように言ったと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 本当は落ちこんでいることが多いのに、周囲からの何をしていても平然としているという評価は変わらなかったという意味。  
イ 自分がしてしまったことに対して、最後は自ら責任を取らなければならぬことが理解できたという意味。

ウ 天然とかのんびりしているなどと評価される自分を変えたかったが、結局、変えることはできなかったという意味。

エ 誰かのうしろに隠れて生きていることに嫌気がさしていたが、自分が先頭に立つことはやはり無理だったという意味。  
オ 何でも自分一人のできることだと思っていたが、実際は誰かに助けてもらわないうまくできなかったという意味。

問七 ——線⑥「咲ちゃんの声は、どこか遠くから聞こえてくるみたいに感じられた」とありますが、「わたし」がこのように感じた理由として最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア なぐさめたくて言ったことを咲ちゃんが否定したので、どう説明しようか考えていたから。

イ 咲ちゃんの仕草に気を取られていて、話している内容がよく理解できなかったから。

ウ 咲ちゃんが自身の性格に不満を持っていたことを知り、とても意外だと思ったから。

エ 自分の勤ちがい気づいた咲ちゃんが大人の世界にいるようで、話を受け入れられなかったから。

オ 近くにいた自分がいちばん咲ちゃんを傷つけていたのだと気づき、ショックを受けたから。

問八 ——線⑦「ずっと気になっていたこと」とありますが、それはどのようなことですか。答えなさい。

問九 ——線⑧「わたしはみんなほど腹が立たないんだ」とありますが、「咲ちゃん」が茉莉香のうそに腹が立たない理由として最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 茉莉香にも欠点があるとわかって安心するとともに、茉莉香のうそは他人を傷つけるようなひどいものではなく共感できるところがあるから。

イ 自分も人を傷つけないためにうそをつくことがあるので、茉莉香の立場に立って彼女がうそをつく理由を考えることができるから。

ウ 茉莉香のうそを暴くために発言を一つずつ検証して、茉莉香の行動すべてに目を光らせるようなまねはしたくないと思っっているから。

エ 茉莉香はただその場で思いついたうそを言っただけだが、自分がその時に望んでいることを代弁してくれている部分もあるから。

オ 茉莉香のついたうそを、うそと知りながらもそのまま受け入れることで、自分が少しでも茉莉香に近づきたいと考えているから。



問十 ——線⑨「泣き笑いのような顔をして」とありますが、このときの「咲ちゃん」の気持ちとして最も適当なものを次のア～オから選び記号で答えなさい。

ア 自分を助けてくれたむっちゃんへの感謝と、大切な友だちであるむっちゃんにしまったことへの後悔こうかいが入り交じった気持ち。

イ 理想の姿からはほど遠い今の自分に悲しい気持ちを抱いだくとともに、そんな自分を変えてくれたむっちゃんがいることにほっとした気持ち。

ウ むっちゃんのようになりたいたいと思う気持ちを断たち切り、自分の性格を前向きにとらえて生きようと決意したものの、本心ではまだ整理がつかず混乱している気持ち。

エ むっちゃんと話をしたことで、自分はまだむっちゃんに今までのことを謝あやまっていないと気づき、むっちゃんへの申し訳なさ自分への情けなさが一気にこみ上げる気持ち。

オ 茉莉香が転校してきたことで、むっちゃんとの仲が悪くなってしまったが、むっちゃんと以前のように付き合うことができるかと分かって喜ばしい気持ち。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 学習する際の姿勢と学力とのインガ関係を調べたい。
- ② 健康のため脂肪とトウの摂りすぎには注意が必要だ。
- ③ フンマツの調味料で味付けする。
- ④ 海の研究から都心にもヒガタがあることが分かった。
- ⑤ 技術力の向上をハカる。
- ⑥ 学生の本分は学問を修めることにある。
- ⑦ アメリカが優勝した表彰式で星条旗が掲げられた。
- ⑧ 飲み薬を処方された。
- ⑨ キリスト教のなかにも色々な宗派がある。
- ⑩ 国内最大規模のファッションショーが行われる。

問題四

次の①～⑤のAとBは、どちらも慣用表現をふくんだ文です。例にならって、後の問に答えなさい。

問一 A、Bの空欄には共通する言葉が入ります。それぞれその言葉を言い切りの形に直し、ひらがなで答えなさい。  
問二 Aの [ ] をふくむ慣用表現の意味を下のあくきから選び、それぞれ記号で答えなさい。

例 A もつともな意見に「なるほど」と膝を [ ] た。

B ポイントがつかならその金額で手を [ ] う。

問一 共通する言葉 …………… 答 うつ

問二 Aの慣用表現の意味 …………… 答 感心する。

① A 一度味を [ ] たらやめられない。

B 業界トップの座を [ ] 。

② A 板に [ ] た司会ぶり。

B きざな話し方が鼻に [ ] 。

③ A 他言するなど釘を [ ] 。

B 人に後ろ指を [ ] れる。

④ A あとでほぞを [ ] でもおそい。

B 計画には彼が一枚 [ ] ている。

⑤ A 教養を鼻に [ ] 。

B 腕によりを [ ] た料理。

ア	自慢する。
イ	人の振る舞いなどがうつつとうしく感じられる。
ウ	後悔する。
エ	前もって念をおす。
オ	仕事や役目が見合っている。
カ	うまくいったことがくり返されると期待する。
キ	くわだて、事件などに関係を持つ。

問題五

次の①～⑩の言葉に続けるのに最も適当な文を下のア～サから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① さっぱり
- ② 必ずしも
- ③ とんだ
- ④ なぜ
- ⑤ あらゆる
- ⑥ どうぞ
- ⑦ もし
- ⑧ いくら
- ⑨ たいした
- ⑩ たった

- ア そんないたずらをするのか。
- イ 怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>でなくて良かった。
- ウ こちらへおいでください。
- エ 一度だけ会った人だ。
- オ 可能性を考える。
- カ 正しいとはかぎらない。
- キ 勝つたとしてもうれしい。
- ク 探しても見つからない。
- ケ 見当がつかない。
- コ 太陽がまぶしい。
- サ 勘<sup>かん</sup>ちがいをして笑われた。

(以下余白)